

## [A年]復活節第6主日(2021年5月9日)

## 【旧約聖書日課】列王記上 18章20～39節

<sup>20</sup>アハブはイスラエルのすべての人々に使いを送り、預言者たちをカルメル山に集めた。<sup>21</sup>エリヤはすべての民に近づいて言った。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え。」民はひと言も答えなかった。<sup>22</sup>エリヤは更に民に向かって言った。「わたしはただ一人、主の預言者として残った。バアルの預言者は四百五十人もいる。<sup>23</sup>我々に二頭の雄牛を用意してもらいたい。彼らに一頭の雄牛を選ばせて、裂いて薪の上に載せ、火をつけずにおかせなさい。わたしも一頭の雄牛を同じようにして、薪の上に載せ、火をつけずにおく。<sup>24</sup>そこであなたたちはあなたたちの神の名を呼び、わたしは主の御名を呼ぶことにしよう。火をもって答える神こそ神であるはずだ。」民は皆、「それがいい」と答えた。

<sup>25</sup>エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたたちは大勢だから、まずあなたたちが一頭の雄牛を選んで準備し、あなたたちの神の名を呼びなさい。火をつけてはならない。」<sup>26</sup>彼らは与えられた雄牛を取って準備し、朝から真昼までバアルの名を呼び、「バアルよ、我々に答えてください」と祈った。しかし、声もなく答える者もなかった。彼らは築いた祭壇の周りを跳び回った。<sup>27</sup>真昼ごろ、エリヤは彼らを嘲って言った。「大声で呼ぶがいい。バアルは神なのだから。神は不満なのか、それとも人目を避けているのか、豚にでも出ているのか。恐らく眠っていて、起こしてもらわなければならないのだろう。」<sup>28</sup>彼らは大声を張り上げ、彼らのならわしに従って剣や槍で体を傷つけ、血を流すまでに至った。<sup>29</sup>真昼を過ぎて、彼らは狂ったように叫び続け、献げ物をささげる時刻になった。しかし、声もなく答える者もなく、何の兆候もなかった。

<sup>30</sup>エリヤはすべての民に向かって、「わたしの近くに來なさい」と言った。すべての民が彼の近くに來ると、彼は壊された主の祭壇を修復した。<sup>31</sup>エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルである」と告げられたヤコブの子孫の部族の數に従って、十二の石を取り、<sup>32</sup>その石を用いて主の御名のために祭壇を築き、祭壇の周りに種ニセアを入れることのできるほどの溝を掘った。<sup>33</sup>次に薪を並べ、雄牛を切り裂き、それを薪の上に載せ、<sup>34</sup>「四つの瓶に水を満たして、いけにえと薪の上にその水を注げ」と命じた。彼が「もう一度」と言うと、彼らはもう一度そうした。彼が更に「三度目を」と言うと、彼らは三度同じようにした。<sup>35</sup>水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちた。<sup>36</sup>献げ物をささげる時刻に、預言者エリヤは近くに來て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。<sup>37</sup>わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に戻したのは、あなたであることを知るでしょう。」

<sup>38</sup>すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をなめ尽くした。<sup>39</sup>これを見たすべての民はひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 列王記上 18章20～39節

<sup>20</sup>アハブはすべてのイスラエルの人々に使いを送り、預言者たちをカルメル山に集めた。<sup>21</sup>エリヤはすべての民に近づいて言った。「あなたがたは、いつまでどっちつかずに迷っているのか(直訳-日本の枝を跳びはねるのか)。もし主が神であるなら、主に従いなさい。もしバアルが神であるならバアルに従いなさい。」だが民は一言も答えなかった。<sup>22</sup>エリヤはさらに民に言った。「主の預言者としては、ただ私だけが一人残った。それに対して、バアルの預言者は四百五十人もいる。<sup>23</sup>雄牛二頭を連れて來なさい。一頭の雄牛を彼らに選ばせ、それを切り裂いて薪の上に載せ、火をつけずにおかせなさい。私も一頭の雄牛を同じようにし、薪の上に載せ、火をつけずにおく。<sup>24</sup>それから、あなたがたは、自分の神の名を呼び、私は主の名を呼ぶことにしよう。火をもって答える神があれば、それが神である。」民は皆、「それがいい」と答えた。

<sup>25</sup>エリヤはバアルの預言者たちに言った。「あなたがたは大勢だから、まずあなたがたが一頭の雄牛を選んで準備し、あなたがたの神の名を呼びなさい。ただし、火をつけてはならない。」<sup>26</sup>彼らは与えられた雄牛を引いて來て整え、朝から昼まで、「バアルよ、私たちに答えてください」と言ってバアルの名を呼んだ。しかし、何の声もなく、答える者はいなかった。彼らは自分たちの造った祭壇の周りを跳び回った。<sup>27</sup>昼になり、エリヤは彼らを嘲って言った。「大声で叫ぶがいい。バアルは神なのだから。瞑想しているか、それとも用を足しているか、豚にでも出ているのか。ひよっとすると、彼は眠っているの、目を覚まさないといけないだろう。」<sup>28</sup>彼らは大声を張り上げ、自分たちの習わしに従って、剣や槍で身を傷つけ、血を流すまでに至った。<sup>29</sup>このようにして、真昼が過ぎて、供え物を献げる頃になるまで彼らはわめき叫んだが、何の声もなく、答える者もなく、何の反応もなかった。

<sup>30</sup>エリヤがすべての民に、「近くに來なさい」と言うと、民は皆彼の近くにやって來た。そこで、彼は壊された主の祭壇を修復した。<sup>31</sup>エリヤは、主がかつて、「あなたの名はイスラエルとなる」と告げられたヤコブの子孫の部族の數に従って、十二の石を取り、<sup>32</sup>それらの石を用いて、主の名によって祭壇を築き、祭壇の周囲にニセアの種が入るほどの溝を掘った。<sup>33</sup>それから、薪を並べ、雄牛を切り裂いて、薪の上に載せ、<sup>34</sup>「四つのかめに水をいっぱいにして、焼き尽くすいけにえと薪の上に注ぎなさい」と命じた。彼が、「もう一度」と言うと、彼らはもう一度そうした。彼が更に「三度目を」と言うと、彼らは三度目も同じようにした。<sup>35</sup>水は祭壇の周りに流れ出し、溝にも満ちた。<sup>36</sup>供え物を献げるころになると、預言者エリヤは近くに來て言った。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ。あなたがイスラエルの神であり、私がおあなたの僕であるということ、またあなたの御言葉によって、私がこれらすべてのことを行ったということが、今日、明らかになりますように。<sup>37</sup>お答えください。主よ、お答えください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に戻したのは、あなたであることを知るでしょう。」<sup>38</sup>すると、主の火が降って、焼き尽くすいけにえや薪、石や塵を焼き尽くし、溝の水をなめ尽くした。<sup>39</sup>これを見た民は皆その前にひれ伏し、「主こそ神です。主こそ神です」と言った。

## 【使徒書日課】〔新共同訳〕

## ヘブライ人への手紙 7章11～25節 (26～28節)

11ところで、もし、レビの系統の祭司制度によって、人が完全な状態に達することができたとすれば、——というのは、民はその祭司制度に基づいて律法を与えられているのですから——いったいどうして、アロンと同じような祭司ではなく、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられる必要があるでしょう。12祭司制度に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずです。13このように言われている方は、だれも祭壇の奉仕に携わったことのない他の部族に属しておられます。14というのは、わたしたちの主がユダ族出身であることは明らかですが、この部族についてはモーセは、祭司に関することを何一つ述べていないからです。15このことは、メルキゼデクと同じような別の祭司が立てられたことによって、ますます明らかです。16この祭司は、肉の掟の律法によらず、朽ちることのない命の力によって立てられたのです。17なぜなら、

「あなたこそ永遠に、

メルキゼデクと同じような祭司である」

と証しされているからです。18その結果、一方では、以前の掟が、その弱く無益なために廃止されました。——19律法が何一つ完全なものにできなかったからです——しかし、他方では、もっと優れた希望がもたらされました。わたしたちは、この希望によって神に近づくのです。

20また、これは誓いによらないで行われたのではありません。レビの系統の祭司たちは、誓いによらないで祭司になっているのですが、21この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方に対してこう言われました。

「主はこう誓われ、

その御心を変えられることはない。

『あなたこそ、永遠に祭司である。』」

22このようにして、イエスはいっそう優れた契約の保証となられたのです。23また、レビの系統の祭司たちの場合には、死というものがあるので、務めをいつまでも続けることができず、多くの人たちが祭司に任命されました。24しかし、イエスは永遠に生きているので、変わるごことのない祭司職を持っておられるのです。25それでまた、この方は常に生きていて、人々のために執り成しておられるので、御自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことができになります。

26このように聖であり、罪なく、汚れなく、罪人から離され、もろもろの天よりも高くされている大祭司こそ、わたしたちにとって必要な方なのです。27この方は、ほかの大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために毎日いけにえを献げる必要はありません。というのは、このいけにえはただ一度、御自身を献げることによって、成し遂げられたからです。28律法は弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後になされた誓いの御言葉は、永遠に完全な者とされておられる御子を大祭司としたのです。

## 【聖書協会共同訳】(2018年版)読み比べ

## ヘブライ人への手紙 7章11～25節 (26～28節)

11ところで、もし、レビの祭司制度が完全な者であったならば——民はこの祭司制度に基づいて律法を与えられたのです——、どうして、さらに「アロンに連なる」ではなく、「メルキゼデクに連なる」と呼ばれる別の祭司が立てられる必要があるでしょう。12祭司制度に変更があれば、律法にも必ず変更があるはずです。13このように言われている方は、誰も祭壇の奉仕に携わったことのない別の部族に属しておられます。14私たちの主がユダ族出身であることは明らかですが、この部族についてはモーセは、祭司に関することを何も述べていないからです。15このことは、メルキゼデクに連なる別の祭司が立てられたことで、いっそう明らかです。16この方は、肉の戒めの律法によらず、朽ちることのない命の力によって祭司となられたのです。17こう証しされています。

「あなたこそ永遠に、

メルキゼデクに連なる祭司である」

18こうして、一方では、前の戒めが弱く無益なために廃止されました。——19律法は何一つ完全なものにできなかったからです——しかし、他方では、もっと優れた希望がもたらされました。私たちは、この希望によって神に近づくのです。

20その上、このことは誓いなしには行われませんでした。レビの系統の祭司たちは、誓いなしに祭司となりましたが、21この方は、誓いによって祭司となられたのです。神はこの方にこう言われました。

「主は誓われた。

その御心を変えられることはない。

あなたこそ、永遠に祭司である。」

22このようにして、イエスはいっそう優れた契約を保証する方となられたのです。23また、レビの系統の祭司たちの場合、死というものがあるので、いつまでも務めを続けることができず、大勢の人が祭司となりました。24しかし、イエスは永遠に生きているので、変わるごことのない〔別訳→終わることのない〕祭司職を持っておられるのです。25それで、ご自分を通して神に近づく人々を、完全に救うことができになります。この方は常に生きていて、彼らのために執り成しておられるからです。

26このように清く、悪も汚れもなく、罪人から離れ、もろもろの天よりも高くなった大祭司こそ、私たちにふさわしい方なのです。27この方は、大祭司たちのように、まず自分の罪のため、次に民の罪のために、毎日いけにえを献げる必要はありません。ご自身を献げることによって、ただ一度でこれを成し遂げられたからです。28律法は、弱さを持った人間を大祭司に任命しますが、律法の後から来た誓いの言葉は、永遠に完全な者とされた御子を大祭司としたのです。

【新共同訳】

【福音書日課】 マタイによる福音書 6章1～15節

1「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように注意しなさい。さもないと、あなたがたの天の父のもとで報いをいただけるだけになる。」<sup>2</sup>だから、あなたは施しをするときには、偽善者たちが人からほめられようと会堂や街角でするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。はっきりあなたがたに言うておく。彼らは既に報いを受けている。」<sup>3</sup>施しをするときは、右の手のすることを左の手に知らせてはならない。」<sup>4</sup>あなたの施しを人目につかせないためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

5「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言うておく。彼らは既に報いを受けている。」<sup>6</sup>だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。」<sup>7</sup>また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひ込んでいる。」<sup>8</sup>彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」<sup>9</sup>だから、こう祈りなさい。

『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。

10 御国が来ますように。

御心が行われますように、

天におけるように地の上にも。

11 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

12 わたしたちの負い目を赦してください。

わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。

13 わたしたちを誘惑に遭わせず、

悪い者から救ってください。』

14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたの過ちをお赦しになる。」<sup>15</sup>しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

【聖書協会共同訳】(2018年版) 読み比べ

マタイによる福音書 6章1～15節

1「見てもらおうとして、人の前で善行をしないように〔直訳→自分の義を行わないように〕注意しなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いが受けられない。」<sup>2</sup>だから、施しをするときには、偽善者たちが人から褒められようと会堂や通りでするように、自分の前でラッパを吹き鳴らしてはならない。よく言うておく。彼らはその報いをすでに受けている。」<sup>3</sup>施しをするときは、右の手のしていることを左の手に知らせてはならない。」<sup>4</sup>あなたの施しを隠すためである。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。」

5「また、祈るときは、偽善者のようであってはならない。彼らは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈ることを好む。よく言うておく。彼らは奥の報いをすでに受けている。」<sup>6</sup>あなたが祈るときは、奥の部屋〔別訳→倉庫〕に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられる父が、あなたに報いてくださる。

7「祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。彼らは、言葉数が多ければ、聞き入れられると思っている。」<sup>8</sup>彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。」<sup>9</sup>だから、こう祈りなさい。

『天におられる私たちの父よ

御名が聖とされますように。

10 御国が来ますように。

御心が行われますように、

天におけるように地の上にも。

11 私たちに日ごとの糧〔別訳→必要な糧〕を

今日お与えください。

12 私たちの負い目をお赦しください

私たちも自分に負い目のある人を

赦しましたように〔直訳→赦しましたから〕。

13 私たちを試みに遭わせず

悪〔別訳→悪い者〕からお救いください。』

14 もし人の過ちを赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたをお赦しになる。」<sup>15</sup>しかし、もし人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの過ちをお赦しにならない。」

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・5月9日「復活節第6主日」の日課主題は「イエスの祈り」。主イエスの祈りの場面は、福音書の中で少なからず見られるが、「祈りについての教え」の場面は限られている。マタイ福音書の「山上の説教」におけるまとまった教えは、並行するルカ福音書(11章)と共に重要な「祈りについての教え」の箇所である。一方、初代教会⇒新約聖書以来、「主イエスが為される祈り」は、旧約における「大祭司の祈り」に典拠を持つ祈りとして「キリスト論」の中で理解されてきた。

旧約日課(列王上 18章より)

・「列王記」上下は、ユダヤ正典「前の預言者」の第四巻で、年代記の体裁で王国時代を物語る文書。

・日課箇所は、「エリヤ物語」(王上 17章以下)中でもっとも有名な「バアルの預言者との対決」場面の一部。エリヤは、バアルの預言者に対して、それぞれの神に献げたいけにえが受け取られるかどうかという対決を申し込み、勝利している。この箇所に限らず「エリヤ物語」の一連の描写の中には、誇張や品位を疑われるような表現もあり、「列王記」全体を枠づける年代記的な(王宮文化的な)描写表現とは異なる趣がある。おそらく、よく知られた民間伝承的な「エリヤ伝説」に依拠しているのだろう。

・この場面の解釈として、バアル預言者の祈りは聞かれず、エリヤの祈りは聞かれた、というように、「祈り」に焦点を合わせることがあるが、ここに「祈り」に相当する語はない。「神/主の名を呼ぶ」は、広く一般的には「神を呼び出す」こと。

・「列王記」には、新約的な「祈り」理解の典型的な例として「ソロモンの祈り」がある(王上 8 章)。ソロモン王は「祭司」ではないが、事実上、「大祭司」として神殿奉獻祭儀を執り行い、祈りをささげている。これを、「列王記」編者は殊更不当なこととは見ていない。「神の言葉を聞く者」として「王」と「祭司」の一体化を一つの理想として見ているのであろう。このような視点から「エリヤ物語」を見るならば、問題の焦点は、「バアル預言者」にではなく、「預言者エリヤ」を通して「神の言葉」を聞こうとしない「アハブ王」と王に追従する「民」に向けられていることがわかる。

### 使徒書日課(ヘブライ7章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、書簡形式の体裁を取った一つの「説教」で、旧約正典に基づいた理解として「大祭司＝キリスト」論を展開している。正典「律法」には、「贖罪日」規定として、「大祭司」が民のために罪の赦しを求める執り成しの祈りをささげることが定められている(レビ 16 章、同 23 章)。本書簡は、旧約的な「贖罪」理解をキリストに適用し、「大祭司＝キリスト」論を展開しているが、これは、より初期の教会で展開されていた「過越の小羊＝キリスト」論(各福音書の描く受難物語や I コリ 5:7 など)で展開されている)を論理的に強化する意図から発したものと考えられる。

・「メルキゼデク」は、「創世記」の族長物語中に一度だけ登場する出自不詳の人物(創 14 章)。その名は「正しい(義の)王」の意味で、おそらく伝説上の理想化された人物。「詩編」110:4 で取り上げられている箇所が、日課箇所内で引用されている(17 節)。正典「律法」で規定される祭司は、レビ族の中から、特に大祭司はアロンの家系から選ばれることになっている(レビ 8~9 章)。しかし、ダビデ王朝時代のエルサレムでは、アロン家とは異なるツァドク家から大祭司が選ばれるようになっており、歴史的に厳密に遵守されてきた制度というわけではないとも考えられる。

### 福音書日課(マタイ6章より)

・日課箇所は、「山上の説教」(5~7 章)の中でも、ユダヤ教から継承した主要な宗教実践である「施し」、「祈り」、「断食」についての教えがまとめられている箇所の一部で、「施し」と「祈り」についての教えの箇所。これらの宗教実践そのものについて、主イエスは、否定的な態度を一切取っておらず、ただ実践する者の姿勢(人に見せず、隠れたところをご覧になられる神の前で行う)をひたすら強調されている。

・「施し」についての教えで「善行」(1 節)と訳されている語は「ディカイオシュネー」で、通常「義」と訳され、「山上の説教」の主題提示部(5:17~20)の中でも取り上げられていた。つまり、5:20 で「あなたがたの義が…」と言われていることは、端的に「施し」のような他者に対する態度や行為に焦点を当てた問題として捉えられており、「マタイ福音書」では、この「義」理解に基づいた教えが重ねられている。

・「祈り」についての教えは、二人称単数「あなた」に対して教えられる前半部(6 節)と、二人称複数「あなたがた」に対して教えられる後半部(7 節以下)に分けられる。主流の聖書学者は、この区別を意味のないものとして解釈しているが、なぜ区別する必要がないのかを明確に説明している者はいない。むしろ、「祈るとき」の教えとして敢えて二段構えになっている構成を無視すると、両者に整合性をつけられなくなる。

### 来週の誕生日(5月9日~15日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-208 番「主なる神よ、夜は去りぬ」(= I 24「父のかみよ、夜は去りて」)は、10 世紀にさかのぼるラテン語聖歌で、従来、6 世紀末の教皇大グレゴリウスの作とされていた。曲は、17 世紀フランスの聖歌集所収の曲を転用。
- ・21-62 番「天にいますわたしたちの父」(☐19 番)は、「主の祈り」の歌詞に西インド諸島のカリブスの旋律が付けられた「コール&レスポンス」形式の讚美。このような形式で「主の祈り」を歌うことは、20 世紀米国のジャズ・ミュージシャンであるデューク・エリントンが宗教的ジャズ音楽の活動の中で始めたことで、メソジスト教会等で取り入れられた。
- ・21-500 番「神よ、みまえに」(= I 58 番歌詞)の歌詞は 18 世紀英国の W.ハモンドの作詞。彼は、当初はメソジスト派で、後にモラヴィア派に転じて、讚美歌の作詞・訳詞を手掛けた。旧 58 番とは異なる曲をホーリネス派の文屋知明が作曲して付されている。

#### 21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」

#### Nocte surgentes vigilemus omnes

1. Nocte surgentes vigilemus omnes, / semper in psalmis meditemur atque / viribus totis Domino canamus / dulciter hymnos,
2. Ut, pio regi pariter canentes, / cum suis sanctis mereamur aulam / ingredi caeli, simul et beatam / ducere vitam.
3. Praestet hoc nobis Deitas beata / Patris ac Nati, pariterque Sancti / Spiritus, cuius resonat per omnem / gloria mundum. Amen.

#### 21-500「神よ、みまえに」

#### Lord, we come before Thee now

1. Lord we come before Thee now, / At Thy feet we humbly bow: / O do not our suit disdain; / Shall we seek Thee, Lord, in vain? / Shall we seek Thee, Lord, in vain?
2. Lord, on Thee our souls depend, / In compassion now descend: / Fill our hearts with Thy rich grace, / Tune our lips to sing Thy praise, / Tune our lips to sing Thy praise.
3. In Thine own appointed way, / Now we seek Thee; here we stay, / Lord, we know not how to go, / Till a blessing Thou bestow, / Till a blessing Thou bestow.
4. Send some message from Thy word, / That may joy and peace afford; / Let Thy Spirit now impart / Full salvation to each heart, / Full salvation to each heart.
5. Comfort those who weep and mourn, / Let the time of joy return; / Heal the sick, the captive free, / Let us all rejoice in Thee, / Let us all rejoice in Thee.